C.ディケンズ　小池滋訳

オリヴァー・トウィスト

CHARLES DICKENS　上　OLIVER TWIST.

ちくま文庫

オリヴァー・トウイスト（上）

一九九〇年十二月四日　第一刷発行
二〇〇二年九月五日　第四刷発行

著者　C・ディケンズ
訳者　小池滋（こいけ・しげる）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一二三
装幀者　安野光雅
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　三松堂印刷株式会社

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三
© SHIGERU KOIKE 1990 Printed in Japan
ISBN4-480-02499-9 C0197

ちくま文庫

オリヴァー・トゥイスト（上）

C.ディケンズ
小池滋訳

筑摩書房

目次

第一巻

第一章　オリヴァー・トゥイスト出生の場所とそのいきさつ……三
第二章　オリヴァー・トゥイストの成長、教育、並びに給食……一七
第三章　オリヴァー・トゥイストが閑職とはいえぬ職業に、あやうく就きそうになった次第……三五
第四章　オリヴァーは別の仕事をあてがわれ、世の中へ第一歩を踏み出す……五〇
第五章　オリヴァーに新しい仲間ができる。はじめて葬式に出かけ、主人の商売がいやになる……六二
第六章　オリヴァーはノアの嘲笑でかっとなり、攻撃に出て相手

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

をいささか驚かせる……七九
第七章　オリヴァー頑として反抗を続ける……八八
第八章　オリヴァー徒歩でロンドンに向かい、途中奇妙な若紳士に出くわす……九九
第九章　愉快な老紳士とその模範生徒たちについて、さらに詳しく物語る……一一三
第十章　オリヴァー新しい仲間の正体がよくわかって来て、高価な代償を払って経験をかち得る。この物語のうちで短いが極めて重要なる章……一二三
第十一章　警察法廷判事ファング殿の裁きぶりの一端を披瀝する……一三三
第十二章　オリヴァーこれまでにないような親切な扱いを受ける　さらにある肖像画について若干の事情が述べられる……一四四
第十三章　物語は愉快な老紳士とその若い友人に戻り、それから賢明なる読者に新しい友人が紹介され、これらの人物に関連して本篇に関係のあるさまざまな愉快な出来事が述べ

られる……一五六
第十四章　ブラウンロー家に滞在中のオリヴァーのその後のいきさつ、並びに彼が使いに出された折りにグリムウィッグ氏なる人物が口にした重大な予言について……一七四
第十五章　愉快な老ユダヤ人とナンシー嬢が、いかにオリヴァー・トゥイストをかわいがっていたかを示す……一九二
第十六章　ナンシーにつかまった後、オリヴァーはどうなったか……二〇五
第十七章　オリヴァーの運命はあい変わらず好転せず、お偉方が一人ロンドンにやって来て、彼の名に傷をつける……二三二
第十八章　オリヴァーがその名も高い友人連とつき合って、いろいろと教化を受けるに至る……二三八
第十九章　一つの注目すべき計画を論じ合い結論に到達する……二五三

第二巻

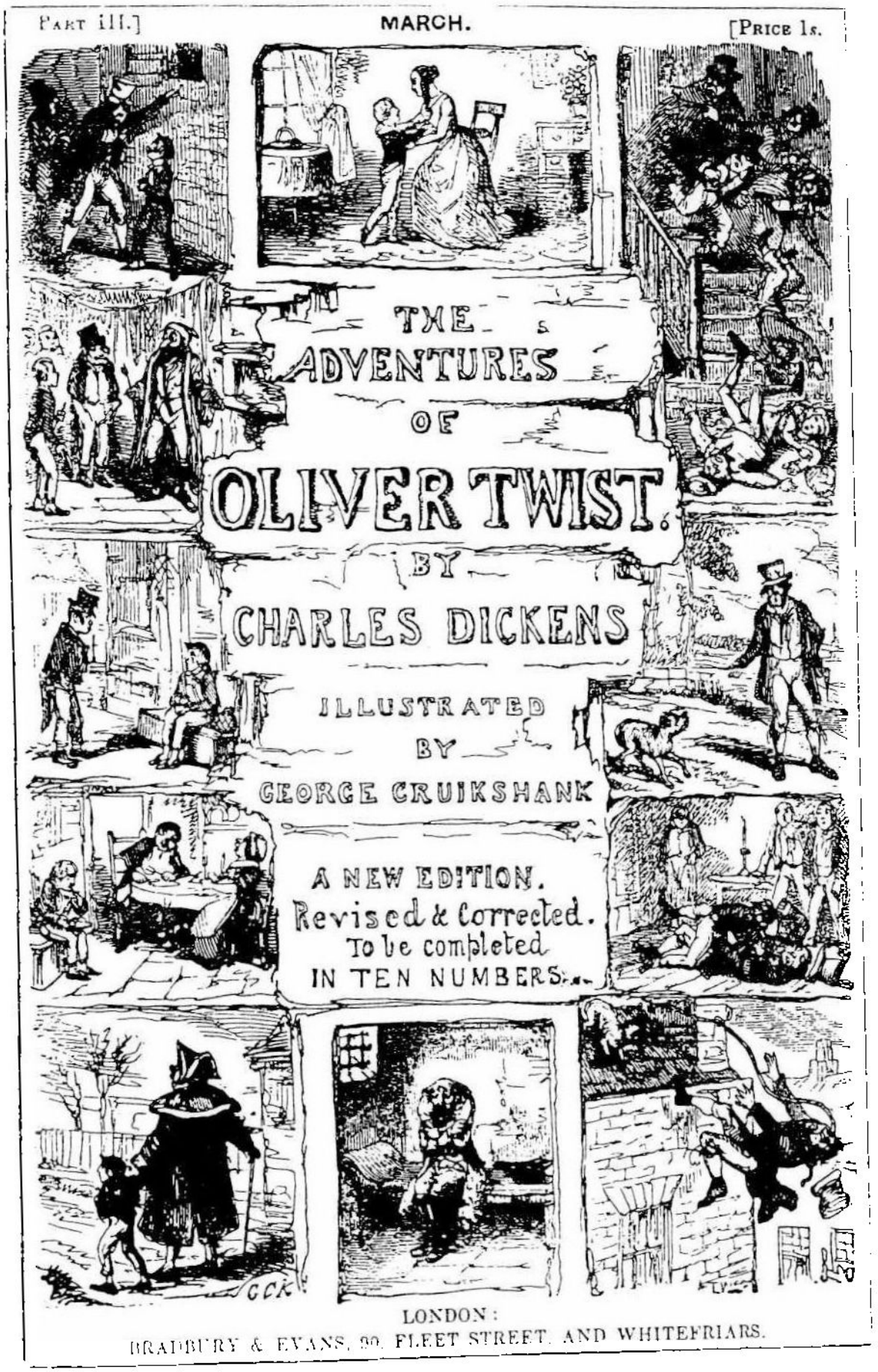
第二十章　オリヴァーがウィリアム・サイクス氏の手に引き渡される……二七〇
第二十一章　遠征……二八三
第二十二章　しのび込み……二九二
第二十三章　バンブル氏とある婦人との楽しき語らいの内容を紹介し、教区吏といえども時には木石ではないことを示す……三〇四
第二十四章　まことにとるに足らぬ出来事を語る短い一章であるが、この物語の中で重要な役割を果たすことになるやもしれぬ……三一七
第二十五章　物語はフェイギン氏とその一党に戻る……三二七
第二十六章　怪しげな人物が登場し、この物語とは切っても切れぬさ

まざまなことが演じられる……三三七
第二十七章　ご婦人を一人置き去りにした怪しからぬ前章の無礼のつぐないをする……三五六
第二十八章　オリヴァーのその後と、彼の冒険……三六九
第二十九章　オリヴァーが運び込まれた家の家族を紹介し、少年がどのような印象を与えたかについて物語る……三八六

本文挿画（中扉裏除く）　ジョージ・クルックシャンク

オリヴァー・トウイスト（上）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



1846年版〔分冊本の紙表紙〕

第一卷

第一章

オリヴァー・トゥイスト出生の場所とそのいきさつ

いろいろな理由から名前は言わぬ方がよさそうだし、さりとて仮の名をつける気にもならないから、ある町としておくが、そういう町の公共の建物の一つに、町の大小を問わずたいていの町におなじみの名誉なものがある。すなわち救貧院であるが、この町の救貧院で人間の一人がこの世に加えられた。その日時なんかは、少なくとも今のところでは読者にとってどうでもよさそうなことだから、わざわざここで断わる必要もあるまいし、その名前はといえば、既にこの章の冒頭に書いてある。

救貧院の医者の手でとり上げられたこの子は、この悲しみと苦しみの世の中に送り込まれてからかなり後になっても、とうてい名前をつけるまで生命を全うできそうには思えなかった。もしその通りだったら、この物語は世にあらわれ出ることがなかったろう。かりに万一あらわれ出たとしても、僅か二、三ページを埋めただけだろうから、古今東西の文学の中で、現存するもっとも簡潔にして忠実な伝記のお手本、という最高の名誉をかち得

たことだろう。

救貧院で生まれるということが、そのこと自体、人間の身の上にとってもっとも羨むべき幸運である、などと主張するつもりは全然ないが、特にこの場合に限って言うならば、オリヴァーがそこで生まれたということは、この上もなくいいことだったと言える。というのは、オリヴァーに呼吸という仕事――これは厄介千万な仕事だが、われわれが楽に生きていこうと思ったら、どうしてもやらねばならぬ習慣なのだ――をやらせるのが、かなり難しかったからなので、彼はしばらくの間ぼろをつめた小さな蒲団の上で転がってはあはああえぎながら、この世とあの世の間をふらふらしていたのだ。そしてあの世へ行く見込みの方が確かに強かった。さてこの短い間において、もしオリヴァーをとり巻いていたのが、よく気のつくお祖母さんとか、心配顔の伯母さんとか、経験豊かな看護婦とか、学識の深い医者とかであったならば、彼は間違いなくすぐに殺されてしまっただろう。ところが実際はそばにいたのが、いつもよりたっぷりビールをひっかけて、かなり酔眼もうろうとなった救貧院の婆さんと、請負でこういう仕事を引き受けている外科医だけだったので、オリヴァーと自然との二者だけで、どちらが勝つかの戦いを続けたのだった。そしてその結果、オリヴァーはしばらくもがいた後で、呼吸をし、くしゃみをした。それから、普通の赤ん坊なら三分十五秒後というところだが、それよりもずっと長い時間がたつまで、声という大いに役に立つ道具を与えて貰えなかった男の赤ん坊にしては、まあまあという程度のかん高い泣き声を上げて、この教区にまた一つ厄介ものが増えたことを、救貧院の

一同に告げ知らせたのであった。
このようにしてオリヴァーが、自分の肺を自由に、かつ適切に運動できる証拠を示した時、鉄の寝台の上に無造作にかけてあった、つぎはぎだらけの掛け布がかさかさとゆれて、一人の若い女が蒼白い顔を力なく枕からもたげると、か細い聞きとりにくい声で言った。
「子供を見せて下さい。それから死にたい」
医者は煖炉の方を向いて腰をかけ、手のひらをかわるがわる温めてはこすっていたのだが、その若い女の声を聞くと、立ち上がって枕許の方へ行き、こうした男にしては案外思いやりのある口調で言った。
「死ぬだなんて。元気をお出しよ」
「そうですともさ。とんでもないってこった！」附き添いの婆さんはそう口をはさむと、いままで隅っこの方で見るからにうまそうにちびちびやっていた緑色の罎を急いでポケットにしまった。
「とんでもないってこった！　ねえ先生、この人だってあたしみたいにこの年まで生きてたら、これまで生んだ十三人の子のうち二人残してみんな死んじまって、残りの二人もあたしと一緒にお助け院にご厄介になっていても、死にたいのなんのって馬鹿なこた言わないでしょうにねえ。とんでもないってこった！　ちょっとさ、いい子だから、母親になるってのがどんなにいいことか、ちょっと考えてごらんよ」
せっかく母親になることの未来図を描いて慰めようとしたのに、どうもこの慰めは予定

の効果を生まなかったようだ。病人は首をふると、子供の方に手をさし伸べた。

医者は子供を女の腕に抱かせてやった。女は冷たい血の気の失せた唇を、子供の額に激しくおしつけ、両手でその顔を撫で、荒々しい目つきであたりを見まわし、身ぶるいをし、ぐったりすると――死んでしまった。二人で女の胸や手やこめかみをこすってやったが、血のめぐりは永久に止まってしまったのである。希望や慰めの言葉をかけてやったが、そんなものとはとうの昔に縁が切れていたのだ。

「婆さんや、もうおしまいだよ！」とうとう医者がこう言った。

「ああ、かわいそうに、おしまいだね！」附き添いの婆さんもそう言うと、さっき赤ん坊を抱き上げようとかがんだ時に、枕許にころがり落ちた緑色の壜のコルクを拾い上げた。

「本当にかわいそうに！」

「赤ん坊が泣いたら、遠慮なくわしを呼びに来てもいいよ」ゆっくりゆっくり手袋をはめながら、医者が言った。

「世話のやける子供になりそうだぞ。あんまり泣いて世話がやけたら、おも湯を少しやっておきなさい」彼は帽子をかぶって、戸口の方へ行きかかったが、寝台のところで足を止めて、「きれいな娘だったが、どこから来たのかね？」

「監督さんの命令で昨夜ここに連れ込まれたんで」婆さんが答えた。「街頭で行き倒れになっていたんですとさ。靴がぼろぼろになっていたところを見ると、かなり遠くから歩いて来たらしい。でも、どこから来たのか、これからどこへ行こうとしていたのかは、誰も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com